

とねがわずし

#9 利根川図志

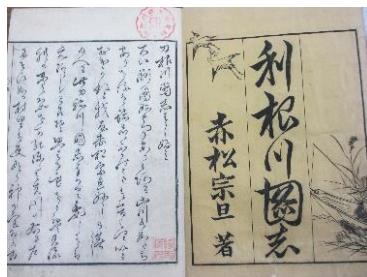
作者：赤松宗旦（あかまつ・そうたん 1806-1862）

刊行：安政2年（1855） - 安政5年（1858）

📖 解題

■ 内容

『利根川図志』は、下総国布川（現・茨城県北相馬郡利根町）を中心に、利根川流域の歴史、風物、伝説、生息する鳥や魚、神社等を多彩に紹介した、全6巻の地誌である。



[291. 3/3/1]

巻1では利根川流域の天候、物産、運輸について述べられている。利根川の全流はおよそ280キロメートルあり、上利根川、中利根川、下利根川の三つに分けられている。巻2以降、本来は上利根川から述べるべきところであるが、上利根川は、作者・赤松宗旦の郷里から遠く、調査に不便であったことから、上利根川の下流にあたる房川の渡し場以下の、赤堀川と権現堂川との分岐点から書き始め、中・下利根川及び、そこに流れ入る手賀沼や印旛沼、流域の名所、旧跡、物産を記している。

利根川流域で生活する人々の様子も生き生きと描かれており、鮮魚を乗せて川を下る船の描写は、情景が目には浮かぶようである。挿絵は玉蘭斎貞秀、山形素真（やまがた・そしん）らの手による。身を振った鮭が大胆に描かれた挿絵は、宗旦自身が表紙に使うことを考えていた絵とされており、当時としては斬新なデザインを考えていたことがうかがえる。

■ 作者

作者は江戸末期の医師、地理学者の赤松宗旦。名は義知。父も宗旦を名乗った。文化3年（1806）7月14日、下総国布川に生まれた。赤松家は南朝の臣、赤松則村を祖とし、祖父の時代に播磨の国より印旛沼開拓の用務をお

びて来たともいわれている。義知の父、赤松（宗旦）恵は天野道順に医学を学び、天明6年（1786）に土浦に住み、寛政8年（1796）から布川に住居を構えたようである。しかし、文化10年（1813）、義知は父を失ったため、母の郷里である印旛郡吉高村に移り、同村の前田宗珉に医学を学び、天保2年（1831）、25歳の時から各地を歴訪して、医学、地学を修めたとされる。そして、天保9年（1838）から再び布川に戻って父祖の医業を継いだ。医業のかたわら、寺子屋を開いて子弟の教育にも熱心にあっていた。交友関係も小林一茶、葛飾北斎ら、幅広い人々との交友があったようである。

安政7年（1860）、『利根川図志』の後刷り500部を作ったが、販売の許可が下りず、赤松家は膨大な負債を抱えることとなり、宗旦は失意のうちに文久2年（1862）、57歳の生涯を閉じた。



本文を読む

<復刻>

『利根川図志』赤松宗旦著 名著刊行会 1967 [291.3/3A]

<翻刻>

『あびこ版新編利根川図志（我孫子市史叢書）』我孫子市教育委員会 1990
[291.3/114]

『利根川図志』赤松宗旦著 柳田国男校訂 岩波書店 1994<岩波文庫>
[4291/7]



参考文献

『『利根川図志』と柳田国男』守屋健輔著 崙書房 1983<ふるさと文庫>
[382.1/335]

『利根川図志紀行』黒川雅光写真 森田保文 聚海書林 1986 [291.35U/35]

『評伝赤松宗旦－『利根川図志』が出来るまで』川名登著 彩流社 2010
[289.1/5368]